

第5回 理化学研究所運営・改革モニタリング委員会 議事概要

日 時： 平成27年2月20日（金）14時00分～16時40分

場 所： 理化学研究所東京連絡事務所

出席者： 【委員】野間口有委員長、池田雅夫委員、手塚一男委員、室伏きみ子委員
山本富夫委員

【理研】野依良治理事長、坪井裕理事、川合眞紀理事、古屋輝夫理事、
大江田憲治理事、有信睦弘理事、加藤重治理事長特別補佐、
山崎泰規研究不正再発防止改革推進本部員、
星野聡研究コンプライアンス本部調査役、山口晴夫人事部調査役、
生越満研究不正再発防止改革推進室長 他

議事概要：

（1）STAP問題に対する理研の対応について

研究倫理教育等に関する理研からの説明の後、委員より以下のような意見が出された。

- ▶ 研究倫理教育の体系図の対象が管理職と一般職となっているが、研究倫理教育責任者が抜けている。また、コーチングやメンタルヘルスというキーワードが入っていない。
- ▶ 体系図はきちんできているように見えるが、それが機能するかが問題。都合がつかないから、もしくは自分の主義主張で受けないということもあるかもしれない。また、客員研究員に対する研究倫理教育をしっかりとしないといけないということが今回の事例から言える。その部分がこの体系図からは見えない。そこをうまく機能させて、全体に徹底する何かが必要。
- ▶ 客員研究員に対する教育については経験ある委員から何度も指摘されている。
- ▶ 現行の書き振りだと、これまで新入職員オリエンテーションをやっていなかったように見える。研究倫理教育という題目をつけていなかっただけで研究不正防止等の教育はこれまでもやっていたのであれば、誤解されないように書き振りを注意すべき。
- ▶ 体系図に色々なことが含まれているということは分かったが、外部に出ていく資料なので、理研のことを知らない人にも分かるように記載した方がよい。ある程度くわしくなってしまうとしても客員研究員についてもきちんと書き込むべき。研究者は一般にこのようなことは余計な負担と考えるので、面倒であっても研究者として重要なことだという雰囲気をもっていくことが大事。これが、研究そのものの評価の中にあるのだ、あたりまえのことであり無駄ではない、余計な作業ではない、という風土を醸成されるとよい。
- ▶ 受講しない人に対して最後は面談までやって説得するというのも大変だと思う。ある機関では、一定の猶予期間を設けて、受講しない人には研究費を使わせないとい

- うことを考えているところもある。予算執行を停止する。そこまで書くと、絶対に機能することが明らか。理研もそうすべきということではなく、それは理研で考えるものだが、外から見たときにきちんと機能しそうだに見えるものを作るとよい。
- ▶ これまでの説明だと、客員研究員に対しては研究室主宰者を通した間接的な教育しかない。直接的教育は法的に無理だという判断か。
 - ▶ 特に理研において実験を行う客員研究員には、間違いなく教育が徹底される必要があると思っている。

STAP 問題に対する理研の対応のまとめに関する理事長からの説明の後、委員より以下のような意見が出された。

- ▶ 理事長の説明は、底流にある一番大きな問題だと思っていたことに触れていた。つまり実験結果に関する相互検証、チームにおける検証の欠如が一番の問題ではないかということであった。理事長も同じように感じておられたことが理解できた。問題の所在が分かった上で具体的にどうすればよいかというところが課題と思っている。
- ▶ 理事長の思いは資料以上に溢れている。行間をもう少しはつきりするとよい。なぜこのような単純な虚構を実績あるベテランが見抜けなかったかということ。理研は不幸にしてこうなっているが、あらゆる研究機関にこのようなことがあり、未然に防いでいる。どういう仕組みだったら未然に防げる形になるか。また、社会への表現も劇場型になってしまった。歴史を揺るがすような大発見のときは、もう一回真実を確認すべき。そこを委員会としてしっかり見ないといけない。
- ▶ 今回の事案はありえないケース。今まで研究不正は PI などが非常にプレッシャーをかけて、追い込まれた若い人がねつ造したり、PI 自身が故意に研究費獲得のために行ったりした、というようなものだった。今回は小保方氏が様々な場所を転々と移動し、盲目的な信頼関係に引きずられてきて、それぞれのところできちんとした検証がなされなかったことが問題だ。早稲田大学、東京女子医科大学、ハーバード大学から理研まで、総括的に各地での研究を見ている人がいない。若い女性だったことから、マスコミも成熟しておらず、研究の中身でないことでおだてあげた。そういったことが負の連鎖になって起こった。こういうことは今後起こらないとは思いますが、今後の様々な機関に対する不正防止に役立ててもらえるようにすることが大事。
- ▶ 本音を言うと、このような問題は規則をいくら制定してもなくなるのではないかと。倫理教育のひとつ前の関わった多くの人々の人間性の問題もあると思う。率直に言って、理研の人々が本件への対策にもものすごいエネルギーを使っていることがもったいない。同様のことが2、3回起こればシステムの問題だが、この問題はめったに起こらないことなので。モニタリングの立場からはシステムがいかにきちんと働くものであるか評価しないとけないが、本当は、このような問題への対処は、

規則以前の問題ではないかと感じる部分がある。

- 人間性の問題と言ってしまおうとどうしようもない。だが、システムの的に何も問題がないかという、チームによる検証の不足というところは少しシステムに関連するところがある。それぞれ専門の違う人が分担してテーマに取り組んだわけで、それぞれの部分を他の人が明確に評価するのは難しいが、皆で一緒になってやった研究なので、一同でチェックしようという場があれば、自分の専門でなくても、このつながりになるのはおかしいのでは、と指摘することもありえたのではないか。中で一緒にやっている人が見る方が、外からピアレビューするよりも有効なのではないか。
- 第二次調査委員会が指摘しているとおおり、人間性の問題だとすると、なぜそのような人を採用したかということになる。そのような人は水際で止めないといけないし、入ってきたとしてもどのように問題の発生を防ぐかということが重要。

(2) 評価書について

評価書案と委員からのコメントに関する事務局からの説明の後、委員より以下のような意見が出された。

- 本委員会としても、今年度中に一度評価書を理事長に出さなければいけないと思っている。
- 評価書の書きぶりについて、文章が練れていない。現在は評価書のたたき台を出してもらった段階で、文章を練るのはこれからと思っている。クローズドセッションで委員会としての考えをフェーズ合わせするという点については、その必要が生じたら考えるべきだと思っている。また今日とか次回とかの会議を通して考える。
- 委員会としては、研究倫理 e ラーニング講習は 5 年に 1 度では少ないという意見が多数派のようだ。
- 大きな、組織的なものは 5 年に 1 回でいいと思う。それ以外が全くないと忘れてしまう。間に簡単なものでもよいので、大事なことをリマインドさせるようなものが必要と思う。
- 理研科学者会議の力が発揮されたのであればそう書いてほしい。意見をいれて仕組みを作ったということ。科学界に権威主義が浸透していたという話があった。科学者コミュニティの活用や、限界、課題があるのだろう。
- 「より上位者のチェック」という点がひっかかった。単発的に表現されているので、もう少し包括的なシステムチェックを。
- 規程を作ったので評価できる、というのは言い訳に聞こえるので、淡々と事実を評価してどうだというようにしたい。

以上